
宝神伝 バトラオーブ

守木菜つくし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宝神伝 バトラオーブ

【Nコード】

N1381F

【作者名】

守木菜つくし

【あらすじ】

異星人の地球侵攻。それに立ち向かう地球人たちの方は明らかに戦う力が足りない。だが、そんな彼らの前に現れたのは侵略者側の姫君だった。一枚岩ではない侵略者達と急成長しなくてはならない地球人の地球をめぐる戦いが始まる。

プロローグ

赤い雲から茶色い雨が降り始める。

しばらくして天候は嵐という言葉が相応しくなり、周辺の視野を狭め始めた。

この雨では宇宙港に着陸する船も、上空で雲が切れるのを待っているはずである。

フルフェイス型のマスクにヘルメット、そして耐水機能の高い兵士服を着ていても警備兵たちにとって雨は忌ま忌ましいものだった。「こちら警備室。今から宇宙港の警備システムを最高レベルに上げる。雨が止むまで所定の場所で待機せよ」

隊長からの通信に、彼らは見回りを切り上げて雨よけのための簡易警備室へ向かう。

見通しの悪い状態では、警備兵がいたところであまり役には立たないからだ。

宇宙にその名を轟かすデイドメン帝国は優れた科学技術を保有し、次々と別の惑星を傘下に収めた。

その反面、自然界のバランスは崩れ始める。いつしかこの星の空に赤い雲が現れ茶色い雨が降るようになる。

それらを無くすことは未だ出来ないが、科学技術によって押さえ込むことは出来た。

帝国はますます繁栄する。

ただ、この星の大地が何かを生み出し育てることは難しくなっていた。

雨音が響く。

警備室では宇宙港の防犯カメラが、茶色い雨の降る様子を映して

いた。

その中の一つが、警備兵とは思われない人影を捕らえる。

「侵入者だ！」

警備隊長が叫ぶ。

「駄目です。警備システムが作動しません！」

降雨時には停泊している宇宙船を傷つけない範囲で機械による狙撃が行われる。その守備範囲はかなり広いのだが、システムが作動しなければただの飾りでしかない。

部下の報告に、彼は急いで警備兵たちに侵入者の存在を知らせる。その途端、今度は警備システムが作動したのだ。

こうなると一応警備兵は狙われないように組まれてはいるが、そうになると侵入者への狙撃が難しくなる。

その機能を無効にしようものなら、こんどは警備兵たちも蜂の巣にしてしまう。

そして警備室にいる部下と外にいる部下から同じことが警備隊長に報告された。

「セルレイン号が動きました！」

それはデイドメン帝国皇帝ヴォルガが特別に作らせた宇宙船だった。

「誰が乗り込んでいるんだ」

だが、理由を探るよりも彼らにはやらなくてはならない。今まさに発進しようとしている船を止めること。

優美な姿のセルレイン号は、ゆっくりと上昇する。

戦闘機がそれを止めようと出動したが、どのような攻撃も防御シ

ールドに守られた宇宙船にはかすり傷一つ付けられない。

そして彼らの元に、帝都から連絡が来た。

王族の一人である姫君の行方が分からなくなったというものだった。

あまり人の通らない深い森を、荒賀健也はひとり登る。

彼は大伯父である仙一郎の頼みで、山の中にある小屋に向かう所だった。

事の起こりは、母親からの緊急連絡。

大伯父が寝込んでいると言うのだ。

驚いた健也は荷物もそこそこに、すぐさま駆けつける。

大伯父夫婦が父親の育ての親だと言うことを聞くまで、健也は大伯父たちを実の祖父母だとばかり思っていたくらいなのだ。

電車を乗り継いで目的地に到着した頃には、夜もとっぷりと更けていた。

そして緊張しながらやって来た健也は、大伯父の家で予想しなかったものを見てしまう。

「おじいさん！ 健ちゃんに嘘をついて呼び出すなんて、恥ずかしいことをしないでください。

今回の怪我だって、山で縄跳びなんてするからやるんです。年齢を考えなさい！」

がっちりと妻の妙子に怒られて、正座させられている大伯父に健也も脱力せざるを得なかった。

その後、妙子が健也をもてなす為に台所へ行くと、仙一郎は苦笑いをしながらテーブルの上に一個の鍵を出す。

「健也……。ワシはしばらくは行けないかもしれない。

ばーさんも、もう年だ。小屋の鍵をお前に託す」

自分も怒ろうかと思ったが、やはり腕や足に包帯を巻いている大伯父を見ていると痛々しい。

健也は苦笑いしながら鍵を受け取った。

「じーちゃん。何でそんなところで縄跳びをしたの？」

すると仙一郎は、にやりと笑って答えた。

「それが男のロマンだからだ」

昨夜の出来事を思い出すと、ため息が出てしまう。

(それで怪我をしたら、ロマンもへったくれも無い気がするが……)
昔から大伯父の思考は理解しにくいところがある。
だが、この大伯父を健也は大好きだった。

彼は立ち止まると、森の木々を見上げた。

木漏れ日がキラキラと光る。

小学生の時からこの山を何度も訪れた。

それでも最初に見たときの光景に再び出会ってはいない。

(やっぱり、あれは夢だったのか……)

大学生になった今では、あの時の事を人に言うことは無い。

小学生のときなら許された内容でも、さすがに中学・高校ともなると変人のレツテルを貼られてしまうからだ。

【白い人が光をまといながら、森の中で見たことも無い化け物を仕留めていた】

その異様な光景に健也は気を失ってしまったのだが、夢だとはと
うてい思えなかった。

それは小学生のときのこと。

健也は夏休みになると大伯父の家に泊まっていた。

両親は仕事の関係で後から伺うということで、彼が先に遊びに来
ていたのである。

彼自身は最初、山奥に行くことに戸惑っていた。

だが、実際には近所に年の近い子が数人いたので、朝から彼らに引つ張り回されながらも一緒に遊びまくっていた。

その日は、大伯父の家で飼われていた犬のシロを散歩させることも兼ねて、朝から近所の山を登るということになった。

道は犬が知っているということ、山の小屋にいる大伯父に弁当を届ける役目を受けたのだ。

ところが山道を歩いていたとき、突然シロがけたたましく吠えたのである。

何か動物がいるのかと思った健也の前に現れたのは、イノシシの顔に人間の身体をした生き物だった。

全身にトゲのようなものがあつたような気がする。

当時の彼は恐怖のあまり身動きがとれずにいた。

しかし、そんな健也の前に現れ異形のものから守ってくれたのが白い人だったのだ。

その身体から零れる光は森を照らし、攻撃は確実に相手を追い詰める。

この直後、何か強い光が起こり、彼は意識を失ってしまったのだ。

次に目が覚めたときは山小屋の中で、大伯父は彼が小屋に到着するなり疲れたから寝ると言ったのでそのまま寝かせたのだと言う。

とにかく山道で起こつたことを話したが、当然信じては貰えない。むしろ、昔この山には天狗がいたとか、お化けが出たと言うことで山狩りをしたら駆け落ちした恋人同士だったとか、全長3メートルの狸が出没した事があるなどの話をされてしまった。

どう聞いても最後の話は作り話の様な気がするが、今度は帰り道で白い人と化け物の出現した場所が分からないのである。

犬も特に警戒することなく、楽しそうに歩いていた。

それからというものの、健也は夏になると一度はこの山に登ることにした。

自分の見たものを確認したいのか、居ないことを確認したいのかは分からない。

だが、今だに健也は当時の夢を見る。

(あれが幻だったら、逆に怖すぎる……)

結局、子ども向けの妖怪百科などを見ても、あれが何なのかハッキリとは分からなかった。

健也は懐かしい道を歩きながら、当時のことを思い出して深呼吸をする。

鮮烈に覚えている異形のものと同じ人の正体を知りたい。

その気持ちは本当だった。

(もうすぐ山小屋だ)

昔から何に使っていたのかはよく分からないが、仙一郎は秘密基地だと言っていた。

(たしかに、変な部屋だったよな……)

常にフローリングの床は綺麗に磨かれ、畳が二畳敷いてあった。そして部屋にあるのは、ちゃぶ台と小さな食器箆笥だけなのである。

仙一郎は自分でお茶を水筒に入れて、山小屋で過ごしていた。

「とにかく健也。山小屋に行ってくれ」

そう言いだした仙一郎の表情は、どこか焦っていた。

「いいけど……?」

「それで『往年の名優たち・全三巻』を持ってきてくれ。結構な重さがあるが、健也なら大丈夫だ」

電話で呼んだ目的はそれかと彼は考えたが、勝手に山に登られても困る。

健也は素直に頷いたのだった。

「おじいさん。健ちゃんに何か変なことを頼んでいないでしょうね」
食事の支度をした妻の言葉に、仙一郎は慌てて返事をする。

「なに、健也が山小屋の掃除をしてくれるそうだ」

すると妙子が不審そうに夫を見た後、健也の方を向いた。
「悪いわね。健ちゃん。」

向こうにある掃除の道具は新しいのばかりだから、家のあるものと交換してきてちょうだい」

山小屋のは置いてあるだけで、ほとんど使っていない。

荷物がいきなり増えてしまい、健也は大伯父の方を見た。

しかし、仙一郎はしばらくくれたのだった。

結局、健也はリュックに掃除道具を入れて山登りをする事になった。

(何か、納得がいかないが……)

もしかすると全三巻の書籍が大判の写真集だったら考えると、彼としてはうんざりしそうになった。

(あれっ……。まだこんな場所か?)

思ったよりも道を進んでいない。

そしていつのまにか鳥の声などが聞こえなくなっている。

彼はある事に思い至った。

(これは、あの時と同じじゃないか!)

今回は一人で行動しているので、誰かの助勢というものは期待できない。

あの時一緒だったシロは二年前に天寿を全うした。

彼はとつさに周囲を見渡す。

ちょうど近くに木の棒が落ちていた。

(よし!)

拾うとした時、慌てた為に彼は転んでしまう。

その倒れた瞬間、何かか上を通りすぎる音がした。

上から折れた枝が落ちる。

「何だ」

とつさに彼はリュックを身体から外した。

本当にあの時と同じなら、どこからか化け物が出てくるはずである。

健也は木の棒を構えたまま、周囲の様子を伺う。

(気のせいか)

しかし、警戒を解く事は出来ない。

しばらくして藪が動き、それは森の中から現れた。

(あの時と同じだ！)

やはり自分の見たものは夢ではなかったのだ。

イノシシのような顔。体つきは人。

全身がトゲだらけである。

彼はどうにか戦おうとしたが、突然の事態に身体が動かない。

(なんて事だ！)

健也の心に絶望感が広がる。

しかし、相手は急に斜め後ろの方を向いたのだった。

「貴様の相手は、この私だ」

獣道のような場所から現れたのは、腕に怪我を負った男性だった。その人物は白っぽい着物と袴を身につけており、手には奇妙な形の剣を持っている。

だが、白い人とは何となく違う気がした。

(いったい俺は何を見ているんだ)

事態の意外な展開に、健也は自分が何を見ているのか分からなくなってきた。

異形のものは健也ではなくその男性の方を向く。

「早く逃げたまえ」

男性はそう叫んだが、健也の頭の中でどう逃げて良いのか、本当に逃げ切れるのかという思いが渦巻く。

ここで男性を見捨てて良いのかという気持ちもあった。

それでも正直言えば、自分がいては足手まといにしかならない。

すぐさま始まった男性の戦いは、たしかに互角だった。

だが、彼は腕の怪我が響くのか、徐々に押され気味となる。

そして戦闘中の一撃で、男性の手から剣が弾き飛ばされた。

剣は少し離れた所の地面に突き刺さる。

「早く！」

もう一度男性が叫ぶ。

この時、健也は剣の方へ走っていた。

(ここで逃げるわけにはいかない！)

彼は剣の柄を持つ。

脳裏に何か白い光と白い人の影が浮かぶ。

「その人から離れる！」

そう叫んで彼は剣を構えた。

改めて見てみると奇妙な防具を付けた人間のようにも見えない事は無いが、何か人間ではないような気がする。

このような存在にどう戦ったらいいのか。

剣から光が零れてる。

手には剣の他に、何か膜のようなものが付いているかのような感触もあった。

表現しがたい存在は健也の方へ襲いかかる。

「それを振れ！」

男性の掛け声と共に、彼は大声をあげて剣を振った。

完全に間合いの外である。

だが、剣が発した光は一直線に異形のものに襲いかかった。

健也の方も反動から尻餅をついてしまう。

森の中に絶叫がこだました。

光の粒子は徐々に間を狭めて、異形のを締めつける。

そしてその身体を石化させたのだった。

苦悶に喘ぐ石像のような姿になったそれは、次にこまかいヒビが

入りついには崩れた。

一連の出来事に健也は呆然としてしまう。

そして手に持っていた剣が急に重くなったような気がした。

あとに残されたのは石の山。
風が吹くと埃が宙に舞った。

緊張の糸が切れたらしく、血の出ている腕を抑えながら男性は膝をついた。

呆然としていた健也は、それを見て駆け寄ろうと動く。
そのとき、木々の間を何かが動いた。

「先生！」

木刀を持った一人の青年が藪の中から突然現れたのだ。
問題は彼が確実に健也を敵と見なしていたこと。

彼は事態の急展開に反応が遅れる。
人に対して剣を向けることにためらったからだ。

しかし、男性の反応は怪我人とは思えないほど素早かった。

「待て！」

瞬時に青年の木刀を奪い、バランスを崩して大地に伏せさせたのだ。

その行動は、非常に鮮やかだった。

「ソウマ。この方は敵ではない」

青年は健也の方を見る。

健也もまた青年の顔をじっと見た。

「……」

「……」

二人が口を開いたのは、ほとんど同時だった。

「蒼馬！」

「お前は健也か！」

幼友達との久しぶりの再会に、今度は男性の方が驚いて二人を見比べたのだった。

男性は持っていたハンカチで止血をしながら自己紹介をする。

山小屋には怪我の手当てが出来るような道具は無いに等しく、健也たちはそのまま下山することになった。

(もしかして、怪我をすることに慣れているのか?)

健也がそんなことを考えてしまうくらい、男性の応急処置は素早い。

「蒼馬の友人に助けてもらうとは、これも何かの縁だろう。」

私の名は旗地 知久。隣の町で道場の師範をしている。

本当に助かった。ありがとう」

頭を下げられ、健也は慌てた。

「いいえ、貴方が無事で良かった。

ええっと……荒賀 健也です。蒼馬とは小さい頃に一緒に遊びました。

ところでアレは何なのですか？」

未だに自分の体験が、現実ではなく夢を見ているのかもと思わないことも無い。

その様子を察したのか、旗地もまた困ったような表情をする。

「荒賀くんの質問はもっともだが、アレを宇宙人の作ったゴーレムだと信じてくれないことには話が進まないのだが……」

案の定、健也は沈黙してしまった。

(宇宙人? ゴーレム???)

納得出来そうだが、納得してしまう自分を疑いたくもある。

思わず蒼馬の方を向いたが、幼友達は何も言わない。

「とにかく荒賀くんは明日、私の道場へ来てくれ。」

イグニサスが君を認めている。我々には君の力が必要だ」

「えっ?」

全然話の流れが分からず、健也は手に持っている剣を見た。

「先生。明日、俺が健也を連れて行きます」

木刀を木刀袋にしまっていた蒼馬が、急に表情を険しくして返事をした。

怒っているような口ぶりである。

「おい。蒼馬！」

勝手に決められて健也は文句を言いそうになったが、相手の不機嫌さはそれ以上に迫力があつた。

「早く戻りましょう。車が到着しているところです」

彼は健也のリュックを持つと、さつさと山道を下っていく。

「荒賀くん。蒼馬の事は気にしないでくれ」

「それは大丈夫です。」

ところで旗地さん。この剣には鞘は無いのですか？

彼としては抜き身で他の人に会いたくない。

しかし、怪我人である旗地に重さのある剣を渡すのは憚られる。

旗地の方はというと受け取ろうとする素振りも見せず、

「鞘は特殊なので、このままで我慢してほしい」

と、答えた。

その言葉が示すかのように、イグニサスはいきなり光の粒子となり消えてしまう。

「！」

彼は驚いて自分の手をじっと見つめる。掌には奇妙な紋様が一瞬現れ、そして消えた。

「イグニサスは強いて言えば、君の中に溶け込んだのだ」

この説明に健也は啞然としてしまった。

「明日の9時に迎えに行く」

蒼馬は旗地を迎えの車に乗せ見送ると、そう言ってさっさと帰ってしまう。

久しぶりに再会したわりには、昔話をする隙もない対応だった。

(あそこまで嫌われる様なことをしたか?)

とはいえ、昔から蒼馬と非常に仲がよかったかと考えると、肯定はしにくい。

(確かあいつ、白い人と出会った一件では、人のこと奇人扱いしていたはずだぞ)

蒼馬だけは自分の話を聞いてくれる。

そう思い込んでいたので、当時の彼の対応に健也は人に話さないほうがいと理解したのである。

結局、その日の山小屋掃除は、服を土で汚しているわりに何もしてはいない。

これについては、

「鍵を落としたと思って周辺を探していたら、持っていくのを忘れたことを思い出した」

と、誤魔化した。

嘘をつくことに後ろめたさを感じないわけではない。

だが、正直に話せば妙子が医者を呼びかねない。

(ばーちゃんは俺が病弱で空想好きの子供だと思っ込んでいるからなあ)

ちなみに健也自身は小中高校では皆勤賞と精勤賞の常連である。

妙子が何故そう思っているのか、彼には謎だった。

その日の夜、健也は奇妙な夢を見た。

手に持っている小さな炎が強い光を放って空へと飛び立った夢。
しかし、空は星も太陽も無い暗い世界だった。

翌朝、彼は朝から緊張していた。

長年気になっていた”白い人”のことが分かるかもしれないのだ。
ただ、旗地の言葉が気になる。

(イグなんとかに認められているって、何だ?)

考えられるのは剣の名前だが、健也自身は学校の授業の一環で剣道をやったくらいである。

剣に選ばれたところで役立てられるわけがない。

しかし、実際にイグニサスは自分が持っている最中に消えてしまった。
った。

(まさか……)

昨夜から考えていたことは、だいたいそこで終わる。

結局は本人と話をしないと、何も分からないからだ。

(蒼馬も連絡くらいよこせ!)

昨日、別れ際に携帯電話の番号を教える。

(あんなにも無茶な動きをしたくせに……)

蒼馬が懐から携帯電話の入った巾着を出したときは、電話機メーカーから特別なものを作ってもらっているんじゃないかと彼は疑ってしまった。

それくらい旗地と蒼馬は、何か非日常的な存在に思える。

(昔は冷静なやつだとは思っていたが、何を考えているのか分からないやつに進化したのか?)

失礼なことを考えながら自分の携帯電話を手に持ったとき、ちょうど電話の呼び出し音が鳴る。

「もしもし。蒼馬か!」

健也が何処にいと尋ねようとしたとき、電話の相手がいきなり怒鳴った。

「健也！ 急いで家を出ろ。」

「迎えの車には乗るな。奴らから逃げろ」

「何言っているんだよ」

「後で説明する。とにかく迎えの車には乗るな」

「切羽詰まった様子に、健也は窓に近づいた。」

「昨日、旗地を迎えに来た車に似た車種が家の前を通りすぎる。」

「一部しか見えなかったから全然違うかもしれない。」

「しかし、何かイヤな予感がした。」

「とにかく家から……」

「そこで電話は切れた。」

（蒼馬……だよなあ）

携帯電話は登録した機種から通信が行われている事は証明してくれるが、相手が所有者本人であるかは証明してはくれない。

いきなりの展開に、健也は一瞬だけ迷ったがすぐに行動を起こした。

妙子が仙一郎を病院へ連れて行ったので、家の鍵は預かっている。

玄関以外の戸締りは終えていたので、彼は手荷物を持つと靴を履

き玄関を出た。

道の方から人の声が聞こえる。

健也は鍵をかけると、門から出ずに玄関から死角の場所へと移っ

た。

「……ここら辺のはずだが」

話し声からすると二人で来たらしい。

だが、そのうちの一人が蒼馬というわけではなかった。

（いったい何なんだ）

呼び鈴が鳴らされる。

「当たり前だが家からは何の物音もしない。」

「もう出掛けたのか」

「会話は聞こえるが、健也の方は自分の目で確認が出来ない。」

身を隠すものが壁しかないからだ。

彼らが戻ろうという話をしていた時、いきなり健也の携帯電話が鳴ったのだった。

正体不明の訪問者たちは、彼の携帯電話の呼び出し音に気がついた。

「お前は泥棒か！」

相手に詰め寄られ、健也は慌てて否定する。

「違う！ 俺はこの家の者だ」

「では何故、このような場所にいる」

「この家の者なんだから、何処にいようと勝手だろ！」

腹を決めて再び携帯電話の着信履歴を見てみると、発信人は蒼馬だった。

健也は怒りをおぼえて、携帯電話のボタンを押す。

失礼極まりない二人は、健也の事を胡散臭そうに見ている。

(いったい何なんだ)

3コール目にして相手と繋がると、彼は思いつきり怒鳴った。

「蒼馬。お前の所為でヒドイ目に遭っているぞ。

早く来い！」

蒼馬という名前に、招かれざる客たちの表情が変わる。

だが、それ以上に彼らを驚かす事態が発生したのだった。

「それは悪かった」

携帯電話とすぐ傍から肉声が聞こえてきたのである。

門から一人の青年が携帯電話を使いながら現れたのだ。

しかも木刀袋を背負ったの登場である。

「岩見 蒼馬！」

「早田さん。隣にいる人はどなたですか」

蒼馬の表情は険しい。

親の仇を見るような表情だと健也は思った。

「岩見、この方は……」

言い訳のように相手を紹介しようとしたが、早田は次の言葉が出ない。

何しろ紹介しようとしていた人物の顔が、ぐにゃりと変形したのである。

「この方は……誰だ？」

早田は助けを求めるかのように、健也と蒼馬を見た。

（誰だじゃない！）

健也は思わずツッコミを入れそうになる。

「貴様。突破者か」

蒼馬が木刀を出そうとしたとき、相手の右腕が伸び彼をなぎ飛ばした。

「蒼馬！」

だが、健也もまた、その左腕によって壁に押しつけられてしまう。逃れようとするが、その腕は粘土のように不定形になりながら健也を捕らえ続けた。

『後継者八逃サヌ』

機械で作られたような声。

しかし、健也はドキツとした。

（イグニサスのことか！）

先程まで思い出せなかった剣の名を、はっきりと思い出す。

そして、ある場面もまた脳裏に蘇る。

（あの白い人は……）

自分の前に現れた人が叫んだ言葉。

「ルベオ イグニサス！」

小学生のときの不思議な出来事。

あの時、白い人がそんな言葉を言っていたような気がした。どうして急に思い出したのかは、健也自身にも分からない。

ただ、その言葉を叫んだことがきつかけとなり、急に健也の身体から赤い光が現れる。

「何なんだ……」

蒼馬は友人が赤い光に包まれているのを、ただ見ているしか出来なかった。

健也の身体を覆う赤い光。

それが全身を覆う真つ赤な戦闘服の形になった時、健也の手にはイグニサスが握られていた。

同時に、健也を押さえつけていた粘土の手は、水分を奪われて脆く崩れていく。

「！」

「今度はこつちの番だ！」

彼は勢いを付けてイグニサスを振るう。

(炎……?)

蒼馬の目に友人の体を包む赤い粒子が映る。

粘土人間はその一撃で瞬時に水分を全て奪われ、その場に崩れてしまった。

その中から出てきたのは金属の箱のようなもの。

チカチカと光を発していた。

「健也。その箱を壊せ」

起き上がるうとしていた蒼馬に言われて、健也はイグニサスを突き刺す。

箱は簡単に金属の塊となり、光もまた消える。

健也は改めて自分のまとう赤い衣服とイグニサスを見た。

「これはいったい何なんだ」

思わず尋ねたが、蒼馬にも答えられない。

「もしかして、初めて見るけどイグニサス専用の防護服じゃないか」
早田はあっさりと言ったが、聞いた方の健也は何故か立っている

のも辛くなって、その場にしゃがみ込んでしまった。

炎 1

一般家庭の庭先にいるには、健也の姿は異様の一言に尽きる。しかし、その姿は長くは続かず、彼の服は部分的に焼け焦げたような感じではあったが元に戻った。

とにかく彼らは早田の車に乗って、隣町にある道場に向かう。

(イグニサスが無い……)

赤い光の粒子となって剣は消えてしまった。

だが、蒼馬も早田もそれを不思議だとは思ってはいない。

健也としては二人に色々と聞きたかったが、とにかく会話をするのも億劫なくらい疲れている。

(これから旗地さんに会うっていうのに……)

グツタリしながら後部座席に身体を投げ出すように座る。

蒼馬が隣に乗り込んだとき、なんとなくほっとしてシートベルトを締め目をつぶった。

淡い灰色の世界。

赤い光が目の前にある。

その周囲を緑色の光と黄色い光がクルクルと回った。

だが、黄色い光は見ようとするとは何故かぼやけてしまう。

(なんだこれは……)

少し離れた場所では青い光が弱く瞬いている。

ところが周辺が暗くなり、4つの光のうち赤以外は輝きが弱くなっていく。

健也は自分を取り巻く闇に何か嫌な感じがした。

『デイド……。これらの武器が……』

断片的に聞こえてきた声に、彼は周囲を見回す。

闇はどんどんと深くなってゆく。

しかし、赤い光だけは尚も輝いていた。

(誰かいるのか！)

不意に誰かに腕をつかまれ、健也は大声を出しそうになった。

驚いて目を開けた時、車は日本家屋の門を潜っている。

健也は何が起こったのか、さっぱり分からなかった。

「やっと起きたか」

蒼馬が不機嫌そうに話しかける。

「俺は寝ていたのか！」

「思いつきり寝ていた」

慌てて彼は自分の格好を見る。

そんな友人の様子に蒼馬は、

「イグニサスを持って戦ったのは夢ではない」

と、冷たく言っただった。

車から降りて堂々とした構えの玄関に立つ。

「荒賀君、よく来てくれた」

奥から旗地が現れる。

健也は軽く会釈をした。

「あの……色々とありまして、こんな格好で伺うことになりました」

「いや、君が無事で何よりだ。話は全て蒼馬から電話で聞いている」

旗地は感激した様子で健也に近づく。

「まさか『ルクベステイ』まで発現させるとは凄いことだ」

意味不明なことを言われて、健也は首を傾げる。

「ルク……なんですか？」

「とにかく詳しい話は奥の部屋でしょう。」

蒼馬と早田も来るように。突破者の事も聞かねばならん

旗地の一瞥に、早田はというと深々と頭を下げたのだった。

そのころ、宇宙の片隅では一隻の宇宙船がワープアウトを成功さ

せた。

船には乗組員らしき者たちはおらず、中央管理室に少女が一人だけ座っている。

彼女は設置されているスクリーンが、周辺の宇宙空間を映し出されたのを見て深呼吸をした。

『姫。ワープ移動は成功しました』

スピーカーから聞こえてきた声に彼女は頷く。

「爺や。セルレイン号の状況を教えてください」

『わかりました、姫』

しばらく機械から光のいくつかが激しく点滅した後、声の主は報告をした。

『船は帝国の追跡を振り切りました。』

攻撃されなかったので、運行システムなどに損傷はありません。

ですが、これから向かう惑星には、既に帝国が設置した装置が起動しています。

そちらの防衛機能に引っ掛かると危険ですから、このまま迷彩モードにします』

その声が終わったと同時に、船の灯がわずかに暗くなった。

『目的地に到着するまで、エネルギー消費を抑えます』

「わかりました」

少女は自分を固定していた椅子のベルトを外すと、スクリーンに近づいた。

「爺や。惑星777には名前があるのですか？」

再び機械から発せられる光が点滅する。

『惑星777を現地の生命体は“地球”と呼んでいます』

宇宙空間の映像が切り替わり、スクリーンには青い星が現れた。

「これが“地球”なのね」

彼女は悲しげに、その映像を見つめたのだった。

炎 2

客間の上座に座らせられた健也は、さっそく旗地から弟子の不始末についての謝罪を受けた。

イグニサスの継承者を倒すために、敵は非常に精密なゴーレムを送り込んだらしい。

その姿に早田はあっさりと騙されたのである。

「今回のことは私の教え方の未熟さが招いたもの。荒賀くんには本当に申し訳ないことをした」

師範が頭を下げたことにより、彼の背後にいた早田と蒼馬も一緒に頭を下げる。

しかし健也としては、何が何だか分からないというのが正直な話だった。

「旗地さん。とにかく分かるように説明してください。俺の身に何が起こっているのですか？」

「正当な質問をしたはずなのだが、健也自身は相手の様子に何か嫌な予感がしてならなかった。

「最初から話すとなると戦国時代まで遡るが、とにかく最後まで聞いてほしい」

そう言つて、旗地は懐から紙を取り出し座卓に広げた。

紙こそ新しいが、描かれていたのは古めかしい地図である。

「……」

「これは私の先祖が記した、この土地の地図の複製品だ。そしてここに妖魔の出現する谷がある」

旗地の断言に、健也は妖魔と呼ばれる物の正体に気がついた。

(もしかして、あの土で出来た化け物の事か……)

驚く健也を見て、旗地は頷く。

「とにかく話を続けよう」

彼の背後では、蒼馬と早田が静かに座っていた。

昔から妖魔が姿を見せると言われる千業峡。

旗地家の先祖である、旗地 慎左衛門がこの地にやって来たのは、妖魔退治の為だった。

だが、最初の頃は妖魔の姿を見ることがすら出来ず、険しい渓谷を彼は歩き続けた。

とにかく千業峡へやって来たのは殿様の命令なので、居なかつたでは済まされない。

逆に逃げ帰ってきたと、剣術仲間や藩の人間たちに言われかねなかつたからだ。

そして十日ほど山をうろついていると、彼は奇妙な場所を見つけた。

千業峡の一角に草木の生えていない場所があるのだが、その場に立つと何故か全身の力が抜けてしまうのだ。

慎左衛門が不審に思い、その日野宿を試してみると土の中から現れたのは……。

「殿様に妖魔退治を勧めた家老だったそうだ」

その現場を見た慎左衛門の驚きようが、健也には想像がついた。

とにかく彼は、すぐさま家老が妖魔に食われたかして姿を写し取られたのだと察した。

そして一撃の元に妖魔を討ち果たしたのである。

彼は城に戻ると、殿様に報告をした。既に妖魔が何人かの家臣と入れ代わっている可能性があつたからだ。

「殿様は聡明な方だったので、引き続き慎左衛門に妖魔退治を命じた。記録によれば五名の家臣が妖魔とすり変わっていたそうだ。ど

うやら家老がわざと何人かに妖魔退治を命じていたらしい」

そして妖魔に倒され、姿を写し取られていたのだ。

「……それは色々な意味で凄いですが、なにか見分ける特徴があったのですか？」

「記録によると、妖魔といわれたゴーレムたちを切り付けたり、向こうが刀を持つと何故か刀がすぐに朽ちてしまうそうさ。

武士の時代である以上、刀を一度も持たずに日々を過ごす藩士はいない。それで分かったそうさ」

その答えに健也は沈黙した。確かに今現在では使うことの出来ない無茶な方法だからだ。

「とにかく旗地家は代々ゴーレム退治をしてきたのだが、時代を経て情報が色々集まってくると、どうも似たような土地が日本各地にあることが分かってきた」

話の内容が急に大きくなり、健也の心臓は大きく脈打った。

「そして昭和の初めに、健也君の言う“白い人”が宇宙からこの地にやって来たのだ」

話が飛んだというべきか、不意打ちのような展開に彼は胸を抑える。

心臓もドキドキするが、身体がとにかく熱いのだ。

「荒賀君！」

旗地は立ち上がると健也の身体を支える。

「身体の中のイグニサスが敵に反応しているのだ。

蒼馬、他の者とこの周辺を見張れ！ 早田は水をバケツに汲んで
いっ」

旗地の命令に蒼馬たちは分かりましたと答える。

健也はその言葉を遠くに感じた。

蒼馬は木刀を持ったまま、急いで道場へと走る。

(突破者がここへ近づくなんて、あの時以来だ……)

蒼馬は以前、ここで起こった事件を思い出した。

(……)

忘れることの出来ない、とても辛い出来事。

だが、今はその感情に囚われるわけにはいかなかった。

健也の所へ行つた時には会わなかったので、蒼馬には道場に誰が居るのかは分からない。

しかし仕事が休みということで、練習に来ている門下生たちがいるはず。

この蒼馬の予想は見事に当たり、3人の兄弟子達が正座で瞑目をしていた。

蒼馬の慌てた様子に彼らは異常事態を察する。

「突破者が近くにいます。警護を頼みます」

「早田を騙した者か？」

どうやら朝の出来事を彼らは大まかに知っているようだが、今はそれについて説明をしている時間はない。

「違います。そっちは終わりました」

蒼馬の言葉に3人の門下生たちは、竹刀を持ったまま次々と道場を出た。

「姿は分かるか！」

年配の門下生が尋ねる。

しかし、蒼馬は首を横に振った。

「イグニサスが反応しているだけです」

「ならば、蒼馬は先生の傍にいたほうがいい。

こっちは竹刀を持ったまま、道路には出られないからな」

門下生たちは次々と道場から出る。

(彼らだって名だたる猛者たちだ)

突破者と戦った回数は、自分よりも多い人達である。

ただ、木刀や竹刀は敵に対して有効ではあるが決定打ではない。

どうしてもイグニサスの力が必要なのだ。

(……)

蒼馬は脳裏に浮かんだ考えを振り払うように頭を動かす。

そして旗地と健也のいる居間へ向かおうとしたとき、塀の傍にある庭木の影で何か動くのを見つけたのだった。

その頃、健也は朦朧とした意識の中で、昔の出来事を思い出していた。

(あの時、白い人はこっちを向いた……)

今まで思い出せずにいた恩人の顔が、ハッキリと形になろうとしている。

ただ、顔が分かっていけると同時に、白い人の身体の方が霧のような状態に変化し始める。

霧は白いまま健也の方へと伸び始めた。

(なんだこれは！)

わけのわからない恐怖を感じて、健也は霧から逃れようとした。

しかし、霧は尚も彼を追いかける。

そして追い付かれそうになったとき、いきなり霧は水へと変化し健也は目を覚ましたのだった。

「荒賀君。大丈夫か！」

旗地の声に、健也はいつたい何が起こったのかと周囲を見回した。何故か右腕から手先まで水に濡れている。

「????？」

何が起こったのか、彼には見当がつかない。

「イグニサスの熱反応が起こったのかと考えて、右手を濡らしたの

だ

「どうしてですか？」

「ルクベステイまで発動させた君は、今やイグニサスの生ける鞘なのだ。」

君の感情にイグニサスは呼応する」

旗地の言葉に健也は耳を疑ったが、どうも冗談では済ましてはくれなさそうな雰囲気である。

そこへバケツを持って早田が駆け込んできた。

「先生、まだ足りませんか！」

しかし、勢い余って彼はその場でひっくり返ってしまい、バケツは空中に投げ出される。

「うわっ！」

「荒賀君！」

旗地はバケツを見事に受け止めたが、水はそのまま健也めがけて撒かれたのだった。

外では先程まで多少なりとも聞こえていた鳥たちの声が、ピタリと止まる。

蒼馬は木刀を構えた。

(どこから来る)

気配を探ろうと目を伏せようとしたとき、屋根の瓦が音を立てた。

「上か！」

この時、屋根から飛び立つものを彼は見た。

銀色に輝く光沢は、明らかに生身の鳥ではない。

(ロボットの鳥……?)

突破者ではなかったという事態に、蒼馬は首をかしげた。

戦国時代から人や獣に化けて周辺を荒らしていた者たちが、どういっわけで鳥のロボットを使ったのか。

(もしかして攻撃ではなく偵察だったのか?)

では何故、偵察なのか。

(健也を特別視しているのか?)

蒼馬はこの事を旗地に報告するべく駆け出した。

何か今までに無いことを起こる。

彼にはそう思えてならなかった。

詳しい話を聞くはずだった部屋は水浸しになり、使用することが出来ない。

そして健也の方かというと、風呂を借りる羽目になった。

(なんでこうなるんだ……)

道場の脇にある風呂場は、家庭用のよりは少しばかり広い。

健也は湯をすくいながら、自分の手をじっと見る。

(やはりイグニサスは俺の中にあるのか……)

それでは自分の中で何かが変わったのかと考えたが、どうにもそういう実感が沸かない。

だが、風呂から上がれば、また理解しにくい話の続きを聞くことになるのは分かった。

彼が何度目かのため息をついた時、風呂場の引き戸が勢いよく開く。

「健也。意識はあるか！」

蒼馬が様子を見に来たのだ。

あまりの事に、健也の方が驚いた。

「いきなり開けるな！」

「そうはいかない。お前が倒れているんじゃないかと先生が気にし始めた。」

早く出る」

長湯をしているわけではないが、そういわれると健也も急いで風呂から出なくてはならない。

「分かった」

「着替えはこちらで勝手に用意した。それを使え」

そう言っつて蒼馬は風呂場から立ち去る。

健也は覚悟を決めて風呂場を出た。

脱衣所には下着とTシャツと布地の厚い作務衣が用意されている。
(えっ……)
慣れない着物に健也はどうしたらいいのか、一瞬戸惑ったのだっ
た。

道場では旗地の前に三人の門下生が神妙な面持ちで座していた。

彼らの胴着には名が書かれており、旗地よりも年上に見えるのが
大路^{おおじ}、少しやせ型で目つきが鋭いのが緑川、温厚そうで小太りなの
が眞部^{まなべ}とあった。

「荒賀くんは詳しいことをまだ知らないのだ。先走った事は言うな
旗地の言葉に大路が驚きの声を上げる。」

「しかし、先生。イグニサスを手にした者がゴーレム退治をしなく
ては、この世界は終わりです」

一瞬の沈黙の後、今度は眞部が口を開いた。

「大路さん。最初から、その荒賀というひとが逃げ出すと思ってい
るのですか？」

会ってもいない人物を最初から決めつけていたら、まとまる話もま
とまりませんよ」

「……」

大路は眞部の方を睨むように見たが、眞部の方は平然としている。
「イグニサスがその人を選んだ以上、我々は逆立ちしても太刀打ち
は出来ませんよ。」

それよりも蒼馬の言う通りなら、敵が視察ロボットを寄越すという
ことの方が問題……」

「来たようだ」

緑川の言葉に、旗地たちは道場の入り口の方を見る。

そこには蒼馬と作務衣に着替えた健也が立っていた。

「色々にご迷惑をおかけしました」

健也は大路の威圧的な雰囲気を感じながら、旗地に対して頭を下

げた。

「いや、荒賀くんが無事で何よりだ。それよりも先程の話の続きをしても構わないか？」

全員の視線が健也に集中する。

こうなると彼としては了承せざるを得ない。

だが、旗地はほっとした表情で、

「ありがとう」

と言ったのだった。

「先程も話したように、戦国時代の頃から旗地家ではゴーレムとの戦い続けていた。

しかし、当時の人間に出来ることは、ゴーレムを出現場所から出さないようにすることだけだった」

とにかくその場に立つと力が抜けてしまうのだ。普通の人には、それ以上のことは無理だったのである。

「しかし、昭和の初めごろに宇宙から”彼”がやって来たのだ」
「……」

旗地は健也の様子を見ながら、慎重に話を続けた。

「白い人の名は”ミネラード”。ここから遙か彼方にある惑星ソーサリアスの最後の生き残りだそうだ」

健也は息をのんだが、先程のようにいきなり倒れることはなかった。

「実は、ミネラードとは最初から会話が成立したわけではない。

昭和の頃は夢などの手段で、たまに断片的に情報が入ってきただけなのだ」

実際に言葉を交わせるようになったのは、平成に入ってからだと旗地は言う。

「そして地球の言葉を覚えた彼から、我々は恐るべき話を知らされた。

今の地球には異星人の作った12本のエネルギー吸引装置が打ち

込まれており、近いうちに地球はエネルギーを全て吸い尽くされてしまうというのだ」

一瞬、健也は話の内容に戸惑った。

そしてようやくと理解し、驚きの声をあげたのである。

「ええっ」

「我々は彼の言葉を信じた。この話はこちらの方でも半分推測されていた事だったのだ」

あまりの事に健也は思わず尋ねた。

「その装置を壊すことは出来ないのですか！」

しかし、旗地は目を伏せがちに答える。

「あらゆる金属、特に鉄が朽ちてしまう場所だ。そもそも穴を掘ることが出来ない。」

爆弾を使うという手段も考えられたが、その刺激でゴーレムたちが複数体で暴れる可能性があった。

なんでもミネラードの星では、それによってかなりの犠牲が出たそうだ」

地球自身と忌まわしき装置の埋め込まれた場所で生きる者たちを盾に、異星人たちは地球からエネルギーを吸い取っている。

健也はこの恐ろしい話に、激しい怒りを感じた。

「あの……、旗地さん」

彼は先程からずっと聞きたかった事を尋ねる。

「何かね？」

「白い人、いいえミネラードさんには会えますか？」

小さいころ自分を助けてくれた恩人である。会ってお礼を言い他ののだが、旗地は困ったような顔をした。

「……それが、最近はその姿を見ていないのだよ。何かあったのか、それともどこかで穏やかに過ごしているのか。こちらにはさっぱり分からないのだ」

とにかく向こうから来てくれないと、今までイグニサスを使っていた旗地にもミネラードについては分からないということだった。

「……荒賀君。正直言えば我々は君に協力をして欲しいと思っている。しかし、この戦いで一番危険に晒されるのは、他でもない君自身だ。そして今まで暮らしていた平穏な時間もまた失われる。

だが、イグニサスの力なくして我々は戦に参加することは出来ないのだ」

あまり時間は与えられないが、すぐに決断するのも無理だろう。

そう言われて、健也は『次にゴレム騒ぎが起きるまで』に結論を出すことになった。

結局、健也は作務衣を借りたまま旗地家の車で、大伯父の家まで送ってもらった。

大伯父たちは病院からまだ戻っていないのは良かったが、彼は重大な事実突き当たる。あまりにも慌てていて着替えをほとんど持たずにここへ来たのだ。何もかも投げ出してしまうような気持ちを感しながら、彼は居間で寝ころんだ。そして天井を眺める。

服については実家から送ってもらう事も考えたが、ボロボロになった理由をどう説明するべきか。

(言えるわけないな)

何より正直に言ったところで、内容が人の想像を超えていた。適当に嘘を言った方が話が早いくらいである。

(旗地さんたちに協力したら、大学とかどうなるんだ?)

家族や友人に今回の出来事を相談するというのは出来そうに無い。あまりにも状況がぶっ飛んでいる。

(一人で考えないと駄目というのは、しんどいな)

地球を守りたい。その気持ちを行動で示すには、いくつも超えなくてはならないハードルがある。それは命懸けの覚悟を必要とするのだ。

(イグニサスが俺の身体の中に入っている……)

あの白い人は、自分のことを覚えているのだろうか？

「そういえば、帰りは蒼馬に会わなかったな」

健也は急に眠気を感じた。とにかく考え続けても答えが出そうになかった。

しばらくして、携帯電話の呼び出し音が健也の傍で鳴る。

彼は半分寝ぼけながら、電話に出た。

「はい。荒賀です」

「荒賀君、早田だ。蒼馬はそちらにいるか？」

相手の声に彼の思考は一瞬止まる。誰なのか分からなかったからだ。しかし、すぐに思い出す。

「いいえ、居ません。蒼馬がどうかしたのですか？」

連絡先を教えてくださいといわれたので旗地に携帯電話の番号を教えただが、まさかすぐに使われるとは思わなかった。しかも、早田の背後で人の声が聞こえる。何を言っているのかは分からないが……。

「いや、居ないのならいい。すまなかった」

そう言っただけで電話は切られた。健也も電話を切ったが、何か嫌な予感がする。

(あいつ、どこかに出かけたのか?)

勝手に帰ったという話なら、早田たちもわざわざこちらに電話をしてはこないだろう。蒼馬は携帯電話を持っているのだから。

そのとき、玄関のドアが開いて、仙一郎と妙子が病院から戻ってきた。手にはお土産らしく菓子パンの入った袋を持っている。

二人は健也が見覚えの無い作業衣を着ていることに驚いたが、服にペンキをベッタリと付けられたという出まかせに納得したらしく、それ以上は聞かないでくれた。

「それなら健ちゃん、こっちに着替えなさい。作務衣は洗って返せるようにしておくわ」

そう言っただけで彼女がタンスから出したのは、ジャージだった。

「ばあちゃん。これは？」

「おじいさんの知り合いがくれたのだけど、サイズが大きくてね。」

健ちゃんなら着れると思っただけで取っただけなの

健也は祖母の心遣いがありがたく思いながら着替える。ジャージのサイズはちょうどよかった。

そして彼は「暗くならないうちに戻る」といって外へ飛び出す。

蒼馬の行く先に心当たりは全然ないが、とにかく家で悶々としている方が彼にとっては苦痛だった。

秘密 1

健也が外へ出たとき、太陽はかなり西に傾いていた。そして闇雲に外を走り回っていたので、蒼馬を見つけるどころか、自分のほうが迷子になりそうだった。

途中で何度も彼と連絡を取ろうとしたが、その度に「電源が切られているか、電波の届かないところにいるかもしれない」というアナウンスが流れる。それでは、もう少し先を進んだら居るのではないか。そう考えていくうちに、ついに彼は馴染みのない場所にまで来てしまった。

(ヤバイ……)

慌てて周囲を見回す。すると、少し離れたところに木々に囲まれた鳥居と建物が見えた。

(ああ、千号神社の裏に来ていたのか……)

小さいころ大伯父たちと遊びに来たことがある神社の森は、夕日の残光を受けて怪しい雰囲気をかもし出している。健也は幼いころに大伯母から聞いた『神隠し』の話思い出した。

それは昔、この辺が干業村と呼ばれていた頃の話。長者の家に器量望みで嫁ぐことになった娘が、婚礼の前日に千号神社でお参りした。ところがそれつきり行方知れずになってしまったのである。怒った長者は娘の両親を責めたて、土地から追い出してしまう。そして神主に娘を出せと詰め寄った。

ところが神主は娘がここで居なくなつたのなら、それは神意あつてのこと。長者に娘を諦めるように言った。

ますます怒つた長者は、「我の意に沿わぬ神仏など、いらぬ」と

暴言をはいたのである。

それから三日後の夜こと。長者の家で火の手が上がり、炎は周辺を焼き尽くしたのだった。このとき、村人たちは神仏に救いを求める長者の声と、それを笑う地響きのような鬼の声を闇の中で聞いた。それつきり長者の姿は消えてしまったのだった。

そして消えた娘はというと話に出てこない。長者の家族はどうなったのかも不明。この土地に伝わる昔話は、恐い状況で終わるのだ。しかし、千号神社の方では、娘の方は神隠しに遭ったあと都の商人と出会い嫁となって幸せに暮らしたということになっていた。

それはこの神社が『悪縁切り』と『良縁結び』で周辺の人たちから信仰されていたからである。

「とにかく神社に行くか……」

神社の鳥居にたどり着けば、一応帰れる。というか、土地勘のない健也では、そうしないと帰ることが難しくなりそうだった。

仕方がないと思いながら駐車場口から神社の中に入る。

すると境内の一角にある大池の傍で、一人の青年が立っていた。周辺は薄暗くなりつつあったが、健也がその人物を見間違えることは無い。彼は健也に気がついてはいなかった。

「蒼馬！ 随分捜したぞ」

いきなり話しかけられて、蒼馬はビツクリした顔で振り返る。

「健也……。どうしてここに？」

「どうもこうもない。携帯電話はどうした」

そう問われて、彼は自分の携帯電話を取り出す。

「……電池が切れている」

単純な理由に、健也はドツと疲れを感じた。

「早田さんたちが俺に連絡を寄越したんだよ。蒼馬が何処に行ったか知らないかって」

「それでわざわざ捜しに来たのか？」

「当たり前だろ。また変なのに絡まれているんじゃないかと思ったんだぞ」

トラブルは起きてほしくないが只の電池切れという理由では、物事を大げさに考えてしまった健也は気恥ずかしかった。

しかも、蒼馬は自分が狙われるというのは有り得ないと言う。

「奴らが警戒するのはイグニサスとその所有者だ。俺のような一般人など、向こうは覚えちゃいない」

その断言は、健也にとって何か重い宣告のように聞こえた。イグニサスと共に居る以上、奴らは何度でも現れるのだ。

会話をしているうちに夜の気配が濃くなり、周囲に灯が灯り始めた。

「……なあ、一つ聞きたいんだが、イグニサスに仲間はいないのか？」

内容の奇妙さゆえか、蒼馬は「何を行っているんだ？」と言わんばかりの顔で健也を見る。

「少なくとも俺は聞いたことは無い。もし仲間がいれば、先生の負担は少しは軽かったはずだ」

たった一人で突破者たちと戦っていたのは、同等の力を持つ武器が他に無かったから。だからこそ旗地の弟子たちは研鑽を重ねて、ようやくと侵略者たちを封じ込めていたのだ。

(やっぱり、一人で戦わないとならないのか……)

その責任が重くのしかかってきた時、健也は不意に上の方から誰かに呼ばれたような気がした。夜空を見上げる。蒼馬もつられて暗い空を見る。

すると神社上空には、いつの間に現れたか仄かに白く透けて見える巨大な何かが、ゆっくりと南から北へと動いていた。意識して耳を澄ますと風の音のようなものが聞こえてくる。

だが、それは十数秒後には闇に溶け込むように消えてしまう。風

の音も聞こえなくなった。

「なんだ今のは……」

呆然としたまま蒼馬は友人に尋ねる。

しかし、健也にも何が空にあったのか見当がつかなかった。

秘密 2

山間の深い森の奥に、ぽっかりと開けた土地が見える。そこに恐ろしく高い塔があった。

石造りのように見えるが、どこかそう見せているだけのようにも思える。扉は簡単に開き、中に入ってみると入り口には螺旋階段があった。

上下に階段は伸びており、見上げても見下ろしてもどこまで続いているのか見当がつかない。

どこかで女性の声が聞こえてきた。下の方かららしい。何かトラブルが発生したかのような雰囲気である。

しかし、それはしばらくして聞こえなくなる。

白い人が『上へ行こう』と言う。ミネラードのような気がした。だが女性の声が気になる。健也は下へ行くべきだと思った。

「下で何かが起こっているんだ！」

『時間がない。イグニサスは……』

一瞬にして、周囲が真っ暗になる。

「！」

いきなりの変化に、健也は驚きのあまり目を覚ましたのだった。

(変な夢を見たな……)

あのあと白い人は何と聞いたのだろうか？ 健也は枕元に手を伸ばすと、置いてあった目覚まし時計で時間を確認する。

(4時か……)

彼は奇妙な飛行船を見た後、蒼馬とともに旗地の許へ引き返したのである。

神社上空に現れたものの正体は不明。その形は公式発表されている地球上の飛行機とは、まるっきり形が違っていた。

しかし、それが何処に向かっているのか、蒼馬にはすぐに分かっ
たらしい。

「向こうには千葉峡がある……」

そこにある異星人たちの基地は刺激を与えると怪物たちを外へと
出し、周辺から星全体へと破壊をし始めるのだ。

今までの危ういバランスは、イグニサスが旗地から健也へと移つ
た事で崩れつつあるのか。その問いに対して正しい答えを得る時間
はない。

健也の脳裏に、逃げまどう人々を襲う怪物の場面がリアルに思い
浮かぶ。

ぐずぐずしていたら犠牲者が出る。

(アノ時ノ様ニ……)

誰かが耳元で囁いたような気がしたが、蒼馬の声ではなかったの
で気のせいだと考える。とにかく彼は「旗地さんの所へ戻ろう」と
言ったのだった。

その後、二人は旗地や道場にいた人々に飛行船の話をしたのだが、
誰一人としてそのようなものを見てはいないという。

だが誰もその話を夢物語だとは言わなかった。

「旗地さん。今から千葉峡へ行きます」

健也は焦りからそう言ったが、それは旗地に止められた。

「夜間の行動は死に行くようなものだ。その道の専門家に連絡を
取るから、今夜はここに泊まりなさい」

「専門家……ですか？」

「我が旗地家と同じように、長い間、異星人と関わり続けた一族が
いるのだよ。明日にでも紹介しよう」

その者たちは忍者の流れを汲み、鬼把番おにわぼんと呼ばれているとのこと。

「明日の早朝、出発する。今は大人しく身体を休めてくれ」

有無を言わせぬ迫力に、健也は従うしかない。しかし客室に案内
されても、屋敷のあちらこちらで人々が動いている気配を感じ、彼

はなかなか寝つけなかった。

しかも、外では急に風が吹き始め、雨戸を揺らす音がいつそう彼の不安を煽る。

それでもなんとか眠りについたら、今度は奇妙な夢を見てしまう。こうなると彼としては、さすがに二度寝をする気にはなれない。

風はいつの間にか止んでおり、あたりは静かだった。

(もういい。起きてしまえ!)

滅入った気分を着替える。洋服は山登りゆえということで、旗地の方で一式用意してくれた。

(丈夫そうな服だけど、それだけ危険を伴うってことかな)

そんなことを考えたとき、急に廊下の電気が点いた。そして……。

「健也。起きているか」

いきなり障子を開けられて、健也は慌てふためいた。蒼馬が女性と一緒に立っていたのである。足音がしなかったので、完全なる不意打ちだった。

もちろん健也は初めて会う女性だった。年は自分たちと同じくらいという気がするが、とにかく睨まれているようで落ち着かない。

三人の間に沈黙が流れる。

女性は蒼馬と健也を交互に見たあと、少々不機嫌そうな表情で口を開いた。

「蒼馬。本当にこの人がイグニサスの新しい所有者なの?」

「そうだ」

「完全に素人じゃない!」

私は認めない! と、お約束のように啖呵を切って、彼女は立ち去った。健也としては一連の話に付いて行けず、困惑しながら蒼馬に尋ねる。

「あの、朝からテンションの高い人は誰なんだ?」

「緑川郁実。緑川さんの姪だ」

年齢は同じだったと思うと言う、蒼馬の曖昧な説明に健也は溜息

をついた。どうも蒼馬は彼女についてあまり関心がないらしい。
とにかく健也の記憶にある緑川は、物静かというか言葉の少ない人だった。

（緑川さんの親戚？ 彼女もこの門下生なのか？）

考えてみれば、すべての門下生が自分に好意的なわけではない。
命懸けの場面でイグニサスを使えるのが剣術の未熟な自分では、彼らも迷惑だろう。

（それでも、やらないとならないんだ……）

旗地の背負っていたものが、いかに偉大か。健也は改めてそれを知ったのだった。

「……とにかく朝食の用意ができた。早く着替えてくれ」
「分かった」

この幼馴染みは自分の味方になってくれるだろうか？
しかし、何となく分が悪そうなのがして仕方なかった。

デイドメン帝国皇女カレンは、目の前に次々と表示されるパネルをじっと見た。

地球と呼ばれる惑星777に帝国が埋め込んだエネルギー吸収システム『ラセン』は、資料によると十三基のはず。

しかし、何度もセルレイン号から各ラセンの制御コンピューターにアクセスを試みるが、大部分が反応はしても途中で通信が遮断されてしまう。その内の一基に至っては無反応なのだ。

確かにラセンはエネルギー吸収システムの中では古いものだが、壊れたという報告は無かった。今でもデイドメンに地球の星体エネルギーを送り込んでいる。

施設と宇宙船の距離が遠すぎるということとは考えにくい。

しかし、そうなると直接ラセンへ降りて確認をする必要が出てくる。

彼女は意を決して、これから夜になるであろう地域のラセンに船を近づけた。

ところがその途中でラセンから船のコンピューターへ攻撃が仕掛けられたのである。そのショックで一時迷彩モードが解除になってしまった。

すぐに迷彩モードを復帰させたが、地球人に見られたかどうかわからない。

(早くしないと……)

地球人にラセンの存在を気が付かれたら大変なことになる。

だが、どういうわけだかラセンのある地域に近づいてみると、今度は逆にどこにあるのかが分からなくなってしまったのだ。

近くにあるはずなのに、所在の確定が出来ない。

今もカレンの守役でありセルレイン号の機能を一手に引き受けて

いるソーベーターが、全力を持ってラセンを探していた。

だが、依然として見つからない。

（まさか、ラセンは本当に壊れてしまったの？）

それとも地球人たちが壊してしまったのか。

カレンはこのとき、地球人の科学力は自分たちの予想を超えて発達しているのではないかと思った。そうなると自分は敵側の人間である。この星の人たちは自分が来た理由を聞いてくれるだろうか。万が一にも血に飢えた凶暴な種族ならば、自分の命はこの星で果てることになる。

彼女は不安な面持ちで、今いる管制室のドアを見たのだった。

太陽の光が空に広がる。車は一路、早朝の山の奥深くを進む。

健也は車の窓から見える風景を見ながら、先程の出来事を思い返していた。

千葉峡。そこは崖崩れなどの虞おそれがある為、一般人の立入は禁止されている。

何しろ異星人の秘密基地付近では鉄が使えない。車もヘリコプターもそこに近づくことが出来ないのだ。

その為、健也たちは別の渓谷の入り口から2時間以上も山道を歩いて、問題の場所へ向うことになる。

この説明を朝食時に聞いたとき、彼は自分の体力が持つかと不安になった。その表情を読まれたのか、同じく朝食をとっている郁美の視線が痛い。

「郁美ちゃん。そんな怖い顔をしないでください。それに貴女を連れて行ったら、こつちが緑川さんに殺されます」

割烹着をつけて給仕をしてくれる早田の言葉に健也は単純にほっとしたが、彼女の方は親の仇のような目で早田を睨み付ける。

そんな中でも蒼馬は平気で食事を続けていた。

(何だか食べた気がしない……)

旗地や他の道場の人たちは先に千葉峡へ向かっているはずである。ある種、置いてきぼりにされた状態である。

蒼馬に尋ねてみると「良くある話」という返事。何が良くある話なのか、健也にはさっぱり分からなかった。

だが、実際に出発点となる奥崎溪谷入り口ではとんでもない事態が発生していた。

道の前方で黒い煙が立ち上っているのが見えたとき、車内に緊張が走る。

「まさか！」

「何かあったんだ」

早田が車のスピードを上げた。

そして到着した奥崎溪谷入り口という看板のある駐車場では、数台の自動車が大破し炎を上げていたのである。

健也と蒼馬は車から降りると、怪我人を安全な場所まで引きずりながらも移動させる。

「しつかりしろ。何かあったんだ」

蒼馬の呼びかけに、怪我人は意識を取り戻す。

「……奴ら……だ。待ち伏せを……」

そのとき、遠くで銃声のような音が二発、三発と聞こえてきた。

秘密 4

正体不明の飛行物体が千業峡へ向かった。

旗地からの連絡に鬼把番たちは昨夜のうちに動いた。彼らは奥崎溪谷へ向かう。

夜の帳が降りている山道は危険極まりなかったが、夜明けを待つことは出来ない。あの場所の怖さは夜が明けてからのの方が格段に高くなるからだ。

(こちら側の飛行物体だとしたら、まだ異星人の方がまだ)

突破者たちが持つ金属腐食能力はこちらの想像力を超えていた。

過日、早田が突破者を車に乗せるといふ事をしでかしたが、今朝方その車の腐食はかなり進んでいる。

もう、道路を走らせることは出来ない。

それゆえ、何も知らない者がこの地の上空を飛んだとしたら、その飛行物体は二度と空を飛ばさせてはならないのだ。

(何としても荒賀君を守らねば……)

イグニサスの新しい後継者は未熟である。しかし、希望でもあるのだ。

旗地は蒼馬を呼ぶ。

そして今、夜明けと共に二体の突破者が鬼把番たちと後からやって来た旗地たちを急襲したのである。

(敵はイグニサスの後継者を恐れているという事か……)

山の中で旗地は息を殺して周囲の様子を窺う。

突破者たちを山から外に出すわけには行かない。今回の二体は明らかに戦闘用の作りになっている。

とにかく向こうの行動パターンが分からない。今までも人家に近づいたかと思うと何カ月も動きを見せなかったりする。長いときは二年くらい沈黙していたという記録もあった。

（ここまで頻繁という事は、やはり荒賀君を警戒しているのだな）
ルクベステイまで発動させたイグニサスの新しき後継者。二体も出てきたという事は、確実に彼を葬るつもりだ。

「そのような事はさせない」

旗地は木刀を握りしめる。

山の中を風が強く吹いた。

奥崎溪谷駐車場では、早田が車のトランクに設置していた通信機を動かす。

「こつちで『ていら隊』に救援を要請するから、二人は先生たちを探してくれ」

その言葉に蒼馬が頷く。

「ていら隊？」

「我々の後方支援部隊だ」

その一言解説に、健也は早田の方を見る。鬼把番の話聞いたときから、旗地に詳しい事はおいおい話すと言われていた。

「でも、怪我人をこのままにするのは……」

「健也！」

二人の会話が耳に入ったのか、今まで気を失っていたと思われていた怪我人が目を開ける。

「私に……かまわず、先生たちを……」

息も絶え絶えな言葉に健也の表情が硬くなる。平和とは言い難い世界が目の前にあるのだ。

（俺に戦えるのか……？）

そんな彼の腕を蒼馬がつかんだ。

「とにかく螺仙窟へ向かうぞ」

車両火災は少しずつ鎮静化し始めていた。

「でも……」

「いいから来い！ 早田さん、あとはお願いします」「蒼馬の気迫に健也は反射的に頷く。

「分かった。任せておけ」

そして二人は森へと入る。

その姿を見送った後、しばらくして早田の耳に車のエンジン音が聞こえてきた。

「けっこう、早いな。もう救援要請済みだったというわけか」
その手回しの良さに、早田は怪我人の方を見たのだった。

宇宙船セルレイン号の船内では、緊急事態を告げるランプがチ力チ力と点滅をしていた。

「姫、どうもラセンへのアクセスが何者かによって妨害されております。これは由々しき問題です」

ソーベールからの連絡にカレンは表情を硬くする。

「では、直接プログラムを読み込ませないとならないですね」

彼女は身につけているネックレスを握った。

「……今からラセンに行きます。爺は私を地上に下ろしてください」
惑星デイドメンを出たときから、一番最悪のことは既に覚悟をしていた。唯一の幸運は、惑星777は彼女が宇宙船の外へ出てても大丈夫な惑星だったことである。

これが猛毒とも言える大気だったりしたら、彼女は慣れない防護服を来て作業をしなくてはならない。

「しかし、これはどうも変です。それにラセンから防衛兵器が動いております」

ソーベールはカレンに、原住民たちに見つかる危険性を告げた。

しかし、彼女は行くと言う。

「でも、このまま何もせずにいるなら、時間だけが過ぎてしまいます。間に合わなかったら意味がありません」

「……」

「一応、武器は持っています」

彼女は管制室の一角にある収納箱から金属のプレスレットを取り出す。

「しかし……」

「これしか方法がないのなら、私は行きます」

彼女はプレスレットをはめると管制室を出た。

空中に浮かぶセルレイン号から外へ出る場合、転送室を使わなく

てはならない。

「姫……」

このとき惑星777の住民からカレンを転送中のセルレイン号が何かしらの攻撃を受ければ、彼女は転送先以外の所へ飛ばされてしまう。下手をすれば転送室で彼女は異空間に消えてしまうかもしれない。

この緊迫した状況は、どっちにしても命懸けであった。

一方、健也たちは少し傾斜のある山道を、奥へ奥へと移動していた。

奥崎の山は人の手がほとんど入っていないのか、獣すら通らなそうな道である。

それもあって健也の方かというと、さっさと先に行く蒼馬に追いつくのが精一杯だった。

「蒼馬……、こんな深い森で旗地さんをどうやって見つけるんだ？」
周囲を見回しても木々ばかり。そして自分たちは人を探すための準備など、まるでやってはいない。

しかも残念なことに、この付近は螺仙窟に近づけば近づくほど通信機などの信憑性はゼロになっていく。機械という機械が狂い始めるのだ。

「……先生たちのことは後回しだ。まずは螺仙窟に行く」

「えっ？」

「俺と健也は螺仙窟で何が起こっているのか見に行く。それが先生から言われた最優先事項だ」

「でも……」

「行くぞ！先生たちは俺たちを行かせるために困らなしてくれてるんだ」

そうしなければ、イグニサスの若き継承者を守ることは出来ない。しかし、彼を育てるための時間がないのである。

「先生はこの山を熟知している。そして敵に襲われようとも、お前が螺仙窟に向かうことを知っているんだ。先生もまた無事なら螺仙窟を目指して動かれる」

健也としては、「それでいいのか?」と思わないことも無いが、戦闘経験は向こうの方が断然上である。蒼馬の言う通り、自分たちは螺仙窟を目指すべきだろう。

正直言えば、その螺仙窟に無事にたどり着けるのだろうかと不安を感じていたが、弱音を吐くことは許されない。

「わかった」

彼は精一杯の強気で答える。

「それと、さつき銃声が聞こえたということは、この山に招かれざる客が入り込んだということだ。健也は俺から離れるな」

「……えっ?」

「突破者に一般的な銃など効かない。だから我々は持たない。味方を傷つけるだけだからな」

しかし、山に銃声は響いた。誰かが入り込んだのである。

猟師なのか、犯罪者なのかは分からないが……。

「つまり、そいつと出会う可能性があるということか?」

「鬼把番の人たちが排除してくれているとは思っが、警戒はしておくべきだろう」

まだ一度も会っていない為、健也の中の鬼把番像は既に忍者そのものになっていた。

そして彼らは再び螺仙窟へと向かったのだが、途中で見晴台のよくな開けた場所に出たとき急に空が明るくなった。

何度か空全体が点滅を繰り返す。健也はその時、光の玉みたいなものが近くに落ちたのを見た。

悲鳴のような声も聞いた。

「今のは何だ!」

蒼馬が驚いて立ち止まる。

しかし、健也の方は悲鳴の主を確認するために、既に光の玉の落下地点を目指して走り出していた。

出会い 1

空全体が光を強めたり弱めたりする。

その現象は周囲の人々にも気づかれた。

だが、たいていの人は「雷？」の一言で終わっていた。

しかし、螺仙窟に関わる人たちには異常事態の発生だと判断する。

「やっぱり何かが起こっているのよ！」

奥崎渓谷入り口にやって来た郁美は、森へ入ろうとする。

それを早田が慌てて止めた。

「駄目だつて！ 郁美ちゃんは今先に道場に帰りなさい」

なんと彼女は救援として呼ばれた人たちを言いくるめて、ここへやって来たのである。

ただ、彼女としては旗地に伝えなきゃいけないことがあった。それを正当な理由にして救援部隊と共にやって来たのだ。

何しろ状況によっては、全ての通信機器が使えなくなっていることもあり得る。

最後は人から人への報告が最終手段となる環境なのだ。

「それならこつちで聞きます。先生への報告というのは何ですか」

早田に詰め寄られて、郁美は返事に窮した。

ここで内容を言ってしまうえば、早田は本気で自分を道場に送り返すつもりである。

しかし、沈黙してはただの足手まといに過ぎない。

「……警察から連絡があったの。どうも奥崎渓谷付近に国際的な窃盗団の一味が入り込んだらしいって。ただ、確認が取れていないから、注意だけはしてくれって言っていた」

このとき早田は先ほど聞こえてきた銃声の意味に気がつく。

(窃盗団の奴らが撃った銃声か……)

この場合、誰に対しての発砲でも面倒なこととなる。発破者が暴れ回っているのだ。自力で動けなくなつた者を助けることは不可能となる。

これは奥崎渓谷から千業峡にかけての一带は国家レベルでの危険地域のため、人が迷ったらそれつきり。

誰も救助に行くことは許されないといい厳しい地区なのである。

しかし、しばらくして黒づくめの男たちが次々と不審者を担いだり引きずったりして戻ってきた。

鬼把番たちである。

だが、その中に旗地の姿はない。

郁美は不安げに千業峡のある方角を見つめたのだった。

光の残像は一直線に健也を目的のものへ導く。

「健也！ 不用意に奥へ行くな」

蒼馬は周囲に気を配りながら、彼の後を追った。今のところ突破者は出てきてはいないが、あのような現象を見れば奴らはこちらへとやってくるだろう。

(……)

蒼馬の脳裏に、過去の忌まわしい記憶が蘇る。

あの時、手を伸ばそうとしたが、奴らに邪魔をされて助けることができなかった。

この出来事は絶対に忘れてはいけない。

(兄さん……)

自分の思考に気を取られて、一瞬、健也の姿を見失う。

しかし、その直後、健也の方で何かあったのか、大声をあげてくれたので場所の特定が簡単に出来た。

(今は余計なことを考えるな！)

蒼馬は自分を捜しているのかキョロキョロしている健也に駆け寄った。

「何だ、これは……」

健也は目の前にあるものに驚く。

あとから来た蒼馬も目を見張る。

深い森の中の奇妙な光景。

そこにあつたのは木々が自らの身体をくねらせて、大きな光の玉を受け止めているかのような姿だった。

「まさか、空間が歪んでいるのか？」

それは時々プラズマのようなものを放出している。どう考えても近づくのは躊躇う代物だった。

「こういうことって、今まであつたのか？」

何もわからない健也としては、蒼馬の持つ情報が頼りである。

だが、頼みの綱の友人は首を横に振る。

「こんなことは聞いたことがない」

「ということは、これが初めてってわけか……」

悩んでいる時間はないのだが、悩まずにはいられない。

そういう矛盾した状況は、招かれざる存在によって終わりを告げた。

出会い 2

藪が動く。

不気味なモーター音を響かせながら、蜘蛛のような金属の脚を持つ丸い泥玉が現れる。その大きさはサッカーボールよりもやや大きいと言ったところだろうか。

表面では赤い光りを点滅させていた。

「まずいのに見つかった」

「敵か？」

「偵察ロボットだ」

蒼馬の呟きに、健也は泥玉と光る空間を交互に見た。

確かに泥玉は緊張感のない姿ではあるが、地球人が作ったものとは思えない。

そうかと思うと近くにある【光る空間】は、そもそも何ゆえの発生なのかがわからない。

「健也！ 来るぞ！」

木刀を構えて、蒼馬は泥玉の向こう側を見る。

「えっ！」

その瞬間、藪の中からこの間も見たイノシシ人間のような怪物が突進してきたのである。

「健也、逃げろ！」

蒼馬は彼を脇に飛ばす。

そして木刀を振るい、怪物の一撃を阻止した。

(ここで健也にイグニサスを使わせてはならない)

蒼馬は次の攻撃に備えて構える。今、この段階で健也の体力を削るわけにはいかないのだ。

しかし、幼馴染みのとっさの判断を健也が納得できるわけがない。「何を言っているんだ」

健也は立ち上がる。

このままでは蒼馬が危ない！
その思いで叫ぶ。

「ルベオ・イグニサス！」

「よせ！」

二人の叫び声が重なる。

しかし、健也の身に変化は現れない。

蒼馬は事の異常さを理解したが、目の前の敵を倒すことに考えを素早く切り替える。

だが、健也は自分の身に何も起こらないという事態が理解できなかった。

その隙を彼は泥玉に突かれることになる。

いきなりそれは蜘蛛のように脚を広げると、健也の身体に飛びかかったのだ。

「うわっ！」

「健也！」

両腕を拘束され、健也はよろける。

ただでさえ足場の悪い場所。

もがいていくうちに、今度は問題の場所から発せられたプラスマのようなものが、泥玉とつながる。

その途端、健也と泥玉は光る空間に引きずり込まれたのである。

あっという間の出来事だった。

しかし、蒼馬には助けに動く余裕はない。

突破者が襲いかかる。

彼もまた絶体絶命の危機だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1381f/>

宝神伝 バトラオーブ

2011年1月28日21時10分発行